木宮正史著
『ナショナリズムから見た韓国・北朝鮮近現代史』

講談社，2018 年

少し長い前置きになるがお許しいただきたい。

地域研究受難の時代である。もちろんその一つの理由は、大学関係の予算が大きく削減される中、人文学・社会科学系のポストが減少しているからである。しかし、理由はそれだけではない。もう一つの理由は、社会科学の中で実証主義への動きが進んでおり、その中で明確な方法論を持たない地域研究への懐疑が広がっているからである。嘗ての発展途上国における現地研究者の研究水準の向上や、グローバル化の進展による研究の英語化と研究成果へのアクセスの容易化とあいまって、「どうして自らが居住する訳でもない国や地域を研究するのか（比較優位を持つ現地の研究者に任せればいいではないか）」という疑問に答えなければならない場面も増えている。

もちろん、その事は地域研究が必要でない、という事を意味しない。しかし、そこで言われている「単に地域の情報を取りまとめて示したものは、研究という名に値しない」という問いにどの様に答えるかは、地域研究が生き残って行く為には重要だ。

そしてその場合には当然、研究内容と併せて研究の在り方をどうするかも考え直す必要がある。最も簡単な方法は、地域研究そのものの中に実証主義的な手法を入れ込む事であり、このやり方だと地域研究とは「特定の地域からケースを選んで行われる研究」という事になる。

とはいえ、この様なやり方には批判もある。何故なら、それでは「地域を理解する」という地域研究本来の目的が果たせないからである。しかしながら同時に単なる「地域事情の紹介」では研究にならない事もまた明らかであり、ここで地域研究は大きなディレンマに直面する事になる。

この様な場合における一つの解決法は、実証研究、或いは何かしらの理論研究から材料を得て、その材料を切り口に地域の全体像を示す、というやり方である。その典型は「○○から見た●●地域」という形の研究である。

そして言うまでもなく、本書、木宮正史『ナショナリズムから見た韓国・北朝鮮近現代史』（講談社）は、その典型的な著作である。ここで材料とされている切り口はナショナリズムであり、著者はこれを基に韓国・北朝鮮の近現代史の何かしらを示そうとしている。著者は、我が国を代表する大学で教鞭を取る、日本の韓国政治研究をリードする第一人者であり、その著者が自らの本来の専門である韓国政治研究の範囲をも超えて、北朝鮮、更には南北朝鮮建国以前の近代史にまで切り込んで分析した本書が豊かで優れた内容を持たない筈がない。その意味で、今後、本書が朝鮮半島の近現代史、とりわけそこにおけるナショナリズムの役割に関心を持つ読者にとって重要な存在となる事は疑いがない。

しかしながら、その事は本書に限界がない事を意味しない。既に述べたように、本書はナショナリズムという切り口から、朝鮮半島の近現代史について叙述しようとした意欲作である。この様な場合、想定されている目的は次の二つのうちの一つであろう。一つは切り口であるナショナリズムに関わる新たな示唆を得る為に、朝鮮半島の近現代史というケースを利用しようとする場合であり、もう一つは逆に、ナショナリズムという切り口を利用して、ケースである朝鮮半島の近現代史に関わる新たな知見を示そうとする場合である。研究書が研究書である限り、その内容は何かしらの先行研究が持たない内容を有せねばならず、それがなければ単なる「先行研究の要領の良いまとめ」以上の意味を有さないからである。

そして本書を紐解いて明らかなのは――例えば同じく朝鮮半島のナショナリズムに関心を有する評者等とは異なり――本書には世界各地に存在する普遍的な現象としてのナショナリズムに対する著者の関心はほどんど見られない、という事である。周知の様にナショナリズムについては、原初主義者から近代主義者に至るまでの様々な視点が存在し、その見方もこれを社会現象の一つとする見方から、一種のイデオロギーとして捉える見方まで実に様々である。にも拘わらず、本書において著者はこれらのナショナリズムに関わる議論には全く触れていない。だからこそ当然の事ながら、これで本書で示される朝鮮半島のナショナリズムが先行研究や他地域のそれらとの間でどう位置づけられるのかも、本書では何も示されていない。

それ故に本書が、その大枠となる切り口であるナショナリズム自体に対して何らかの新しい知見を提供しようとするものではない事は明らかである。であれば、本書は逆にナショナリズムという切り口から、朝鮮半島近現代史に関する新たな知見を示そうとするものなのだろうか。しかし、本書はここでも大きな問題に直面する。先に述べたように、本書ではナショナリズムそれ自体については如何なる議論をも提示していない。しかしながら、ナショナリズムはその訳語に、国民主義、国家主義、民族主義、そして「ナショナリズム」等の多様な訳が当てられるように、それ自身多様な意味を有している。だからこそ、本書で言うナショナリズムが一体何なのか、が示されないと、示されている個々の歴史的事実が一体何なのかを理解する事が困難になる。

にも拘わらず本書では、ナショナリズムに関わる先行研究や他国との位置づけのみならず、そもそも本書が切り口としようとしているナショナリズムが何なのかを提示していない。そして、この様なナショナリズムの定義の不在は、本書に長い影を落としている。何故なら結果として、本書ではその定義次第では、到底「ナショナリズム」の範疇に入りそうもないような韓国や北朝鮮の現象を、数多く「ナショナリズム」の範疇に含めてしまっているように見えるからである。例えば、著者は朝鮮半島を植民地支配した日本の影響力を極力排除しようとする動きを「抗日ナショナリズム」と呼んでいる。朝鮮半島のナショナリズムについては、古くから「抵抗ナショナリズム」的要素の重要性が言われているから、この「抗日ナショナリズム」をそのサブカテゴリーの一つだと見れば、この概念は容易に理解できる。しかしながら、著者は同時に本書でこの「抗日ナショナリズム」に対するものとして、「用日ナショナリズム」という概念を置いている。そして、そこでは、「『用日』ナショナリズムは、日本の植民地支配への積極的協力である『附日』とは異なり、日本の植民地権力との関係を相対体に良好に保ち、その力を利用し朝鮮の『自治能力』を高める事によって、来たるべき独立に備えるというもの」とされる。評者自身が嘗て書いた論文の題材から取り上げるなら、李光洙らの「民族改造論」等がこれに相当するのであろう。

とはいえ、問題はそもそもここで「用日ナショナリズム」と呼ばれているものは、ナショナリズムと呼ぶべきものなのか、という事である。李光洙ら自身のその後の政治的航路が見せたように、ここで言われている「用日」とは現実への妥協の傾きを持った思想であり、実際問題として「用日」と「附日」との間には明確な境界線は存在しなかった。逆に今日の豊富な親日派研究が示すように、総力戦期の植民地支配への協力者も、その多くは遠い将来の民族独立をも断念していた訳ではなく、自らの日本統治への協力を将来の独立実現の為の方便に過ぎないと考えていた。仮に著者が自らナショナリズムの一部であるとする「用日」と、ナショナリズムである事を否定する「附日」の間に明確な一線を見出せないなら、その事は筆者がナショナリズムとそれ以外の区別をも見出し得ていない事を意味している。

本書の最大の問題は、「ナショナリズム」の定義の不在の結果、朝鮮半島近現代史におけるありとあらゆる言説や思想――とりわけ日本をはじめとする諸外国との関係を巡る言説や思想――が「ナショナリズム」の範疇に含まれてしまっている事である。本書においては、同様の混乱は解放後の歴史を巡る記述にも存在する。例えば、著者は朝鮮半島の統一を求める主張を「統一ナショナ

リズム」と呼ぶ一方で、今日の韓国や北朝鮮の一部に見られる様な、現行の体制を維持し、統一を遅らせようとする動きを「統一回避ナショナリズム」と呼んでいる。

しかしながら、ここまで来ると何故に後者が「ナショナリズム」という名で呼ばれるのかは全く明らかではない。仮にここで「統一回避ナショナリズム」というものが、将来の国民的統合より、現状の国家体制の守護を求めるものであれば、それは単なる国家主義（ステーティズム）であり、通常の政治学の用語ではナショナリズムと呼ぶことはできない。国家主義とナショナリズムの違いは、ナショナリズムを語る際の最重要ポイントの一つであり、これを看過したナショナリズム論はあり得ない。他方、この「統一回避ナショナリズム」が単なる現状維持を志向するものであるとすれば、やはりこれもナショナリズムとは呼ぶ事はできない。豊かで平和な生活の維持を希求するのは、ナショナリズムとは関係のない、人々の自然で合理的な欲求に過ぎないからである。

「近代化ナショナリズム」「中堅国ナショナリズム」「産業化ナショナリズム」「維新ナショナリズム」「民主化ナショナリズム」…「ナショナリズム」の濫用は実際、本書の各所に及んでいる。そしてそこでは、抗日から用日、更には附日と繋がる状況に見られた様な、「現実への妥協」に過ぎないものから、民主化や産業化、更にはリアルポリティックス的な現実外交路線と言った、ナショナリズムとは凡そ関係なさそうなものにまで、全て「ナショナリズム」の名が被せられてしまっている。

勿論、評者とて、これらの朝鮮半島の言説や思想の随所に、ナショナリスティックな要素が多少なりとも含まれている事は否定しない。だが、それならば最低限、これらの主張の「どこにナショナリズムがあるのか」が説明されるべきであり、またそれらのナショナリスティックな要素が各々の言説や思想にどのような影響を与えているのが示されなければならなかったであろう。そうでなければ読者には、どうしてこれらの言説や思想が「ナショナリズム」なのかはわからない。

そして本書のナショナリズムに関わる記述がこの様な混乱に満ちたものになった理由は一つである。それはそもそも本書がケースとして選択した朝鮮半島の人々による言説や思想自身が、極めて錯綜したものだからである。ここで重要なのは、この朝鮮半島における議論の特殊性である。例えば本書で想定されている「ナショナリズム」に対応する韓国／朝鮮語は「民族主義（ミンジョクチュイ）」であるが、英語のナショナリズムと韓国語の「民族主義」の間に、大きなニュアンスの違いが存在する事はよく知られていよう。そしてその様な状態は朝鮮半島における――「ナショナリズム」ではなく――「民族主義」の理解を我々にとって困難なものとさせている。

そしてここまで来て我々は本書の本当に価値について知る事ができる。それは即ちこの朝鮮半島における民族を巡る錯綜した議論を、そのままの形で提示した事だ。だとすれば本書は、朝鮮半島の民族主義を分析した結果を示す「出口」の書というよりは、朝鮮半島の人々にとって、民族とは、そして民族主義とは何かを考える材料を提供する「入口」の書なのである。朝鮮半島の人々は、何故に近代化や産業化、さらには民主化や権威主義体制化の過程の中で、常に民族を強く意識し、その事は朝鮮半島における政治的展開にどの様な影響を与えたのか。また同じ民族に関わる意識は、今後の韓国や北朝鮮の動きにどの様な影響を与えていくのか。

こうして本書の出版を機に多くの人が、朝鮮半島における民族主義に関心を持ち、その理解が深まるなら、それは、自らの研究者としての歩みをナショナリズム研究から初めた評者にとっても喜ばしい事だ。そして我々が本書から学ぶ事ができる事がもう一つある。それは時に研究は、深い分析にまで踏み込まざるとも、否、時に踏み込んでいないからこそ、一定の重要な側面をそのまま示す事により、学術的な研究にインパクトを与える事ができる、という事だ。その意味でも、本書を手に「地域研究に何ができるのか」をもう一度考えてみるのも良いかもしれない。

（木村幹　神戸大学）